

## 第四十五章 救援車

非常事態だからかイリが乗っている各停イリ・ライナー救援のために特急ウク・ライナーが首都キープを発車したというアナウンスが流れる。

「イリ様。宇宙戦艦に連絡を」

長老が助言する。

「連絡しなくても分かっているはずよ」

「しかし……」

車内は暖房も切れて寒い。励まし合う声もまばらになる。

「止まっているから攻撃しやすいかも」

若い女性の客が心配する。そのとき列車が大きく振動する。悲鳴が上がる。車内放送が流れるが聞き取れない。イリが大きな声を上げて制する。

「放送が流れているわ。静かに！」

連帯意識が静けさ呼び戻すと誰もが耳を澄ます。

「ただいまの衝撃は武装車両の連結が原因です。特急ウク・ライナーではありません。どういう目的で誰が連結したのか調査中です……と言っても調査する方法はありませんが」

それつきり音声途絶える。乗客は黙ったままかを見合わせる。イリは腕時計を外してタブレットモードに切り替える。腕時計面を少し浮いて大きくなる。そして上空からのイリ・ライナーを映し出す。先頭の無蓋車には前後一門ずつ黒光りした大砲が鎮座する。大砲の横で車掌が触ったり叩いたりして動き回る。結局首をすくめてイリ・ライナーの先頭車両に戻る。しばらくすると車内放送が流れる。

「武装車両について報告します。大砲を積んでいますが大砲兵はいませんでした。と言うことはソシア軍が近づくと自動的に対抗するのも知れません。私には分かりません。それにエンジンは積んでいません。と言うことは牽引してもらえないようです」

イリは心の中で質問する。

「どうやってここまで？」

車掌はまるでこの質問に答えるように音声を流す。

「乗客の皆さんお願いで連結されたのでしょうか。皆さん、ここは踏ん張りどころです。特急ウク・ライナーが来れば何とかかなります」

\*

イリは車掌が自分がいる車内に来たらとつ捕まえてでも質問しようと待っている。他の乗客にもその旨伝えるが、反応は冷ややかだった。

「尋ねたいことは一杯あるけれど業務の邪魔をしていけないわ」

赤ちゃんを抱いた若い女性が制する。すると側にいたそのお母さんの娘だろう、イリに意見する。

「ママの言うとおりでわ。車掌さんは忙しいのよ」

イリの目から涙が溢れる。

「ごめんなさい。私が間違っていました。車掌が来たら、みんなで激励しましょう」

拍手がわいたとき連結ドアがスライドする。車掌が帽子を取って一礼してわびるように答える。

「実は私は特急ウク・ライナーの車掌で人員不足なのでイリ・ライナーの車掌もしています。アルバイト……いえ副業です。慣れないので不手際があるかもしれませんが、一所懸命頑張りますのでご協力お願いします」

この言葉が終わるか終わらないうちに大音響が響く。

「ソシア軍からの砲撃です。床に伏せてください。と言ってもこの過密状態では無理ですよね」  
車掌が先頭車両に戻ろうとする。とっさにイリが叫ぶ。

「何をするの！」

「砲兵がいないので私に扱えるか確かめます」

「私も行きます」

しかし、乗客がイリを阻止する。イリは自分に信頼感がないことを痛感する。乗客は運転手

でもイリでもなく車掌を最も信頼しているようだった。

\*

武装車両に乗り移った車掌は真ん中の小部屋に入ると妖しく輝くコントロールパネルを器用に操作する。向かってくるミサイルに照準を合わせると実行キーを叩く。驚いたことに大砲からレーザー光線が発射されてミサイルを消滅させる。後続のミサイルもすべて片付ける。まるでゲームでも楽しむように車掌はコントロールパネルを操作する。攻撃がなくなったことを確認すると車内に戻る

\*

鮮やかなイエローとブルーの特急ウク・ライナーが連結されると大きな拍手が鳴り止まない。乗客は次々と特急ウク・ライナーに移動する。車内は明るく暖かい。スタッフから温い飲み物が手渡される。

一息ついたとき列車が動き出す。イリ・ライナーと武装車両をもつとせいで牽引する。

「本職に復帰します。とりあえずオデッセイに向かいます。所要時間は約一時間。武装車両を連結していますが油断は禁物。とにかく逃げます」

車掌を信頼する乗客は大きく頷いて中には配布された缶コーヒーを差し出す婦人もいる。

「ありがとうございます。でも私にも配給はありますのでお飲みください」

車掌がイリ・ライナーの方に歩き出す。すると誰かが声を上げる。

「あの車掌の活躍をダレデモスキー大統領に伝えなければ」

賛同する声上がる。そんな賛美の声の中イリは車掌の後を追いかける。人混みの中車掌のようになまく前に進めない。そのうち乗客の一人がイリに近づく。

「女王様でしょ。イリ王国の」

すると少女が追従する。

「間違いないわ。テレビで見たことあるわ。女王様と一緒になんて夢みたい」

すると近くにいた少年が紙と鉛筆を持って近づく。

「サインしてください」

そうすると次々と声上がる。

「私も」

「僕も」

「わたしにも」

すると側から長老が引きつった表情のイリに低い声を出す。

「笑顔、笑顔ですぞ。それだけで元気を与えますぞ」

\*

結局イリがイリ・ライナーの車両に移動して車掌を探すがその姿はなかった。気を持ち直して特急ウク・ライナーに戻る。

『本職は特急ウク・ライナーの車掌』と言ってたから戻ってくるはずじゃ」

しかし、それつきりイリは車掌と会うことはなかった。特急ウク・ライナーはオデッセイ駅に到着する。イリと長老は車掌を探しながら、あるいはすれ違う人に尋ねながら傷だらけのイリ・ライナーに移動する。

イリ・ライナーに連結されていた武装車両は切り離されて特急ウク・ライナーに連結される。そしてイリ・ライナーは「回送」のヘッドマークが付けられて検査を受ける。

「よく走ってくれたわ」

イリがイリ・ライナーをねぎらう。

「イリ様。これからどうなされますか？」

特急ウク・ライナーに連結された武装車両を指さして目を輝かせる。

「誰があんなモノを造ったの？」

「さあ、爺やには分かりませぬ」

「調べて」

「？」

長老は首を傾げるがいやな予感を感じる。

「まさか、武装車両でウクライナー共和国を駆け回るといっているのではないでしょうな」

「そうよ」

「もうこれ以上関係を持たない方が……」

「併合された四州での攻防がますます激しくなります。このままでは原爆が落とされた直後の広島のような廃墟になります。ウクライナ人にとつても親ロシアの人々にとつても不幸です」

長老が首肯する。

「四州にいる軍隊をすべて排除します。そして私が管理します」

この発言に長老はひっくり返る。

「今は女の独裁者が必要です。いつかグレーデッドの総統になったように私はこの四州とクリム半島の独裁者になります。そしてイリ帝国の暫定領土とします」

## 第四十五章 救援車